

カワラハンミョウ

Cicindela laetescrpta

コウチュウ目
ハンミョウ科

伊豆諸島

VU

環境省

EN

【形態・生態】

体長 14～17mm。脚は細く長い。上翅の周辺部に白紋を持つが、伊豆諸島の個体は白紋が細く、国内産で最も黒色部が発達する。成虫は夏季を中心に出現し、越冬はしない。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

一般に海岸の砂丘に生息する種であるが、伊豆諸島では海岸部では確認されず、内陸部からのみ記録されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地は砂漠地帯の中でもごく一部に限定されており、生息条件などは不明である。生息地では植生遷移が進行している個所もあり、今後環境が急速に変化する可能性もあるため、生息状況のモニタリングを継続しつつ保全することが望ましい。また、黒化が顕著で愛好家の採集対象になることから、過度の採集が行われないように注意することが望まれる。

【関連文献】

榎戸良裕, 1989; 荒井充朗, 2000. (執筆: 苅部治紀・田尾美野留・雛倉正人)



クロカタビロオサムシ

Calosoma maximowicz

コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 22～31mm。背面は黒色で鈍い金属光沢を帯びる。肩と後翅は発達する。樹上性で主にガ類の幼虫を捕食し、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

樹林環境に生息し、スダジイを主体とした照葉樹林内からも確認されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大島、利島、新島の記録があり、三宅島にも生息している可能性が高い。今回のレッドリスト改定時の調査では、大島で比較的多数の個体が確認された。生息環境に特に変化は見られないが、国内移入種のアズマヒキガエルが生息する島では捕食の影響を受けている可能性が高い。三宅島では近年の2回の大噴火によってガ類の種構成の変化や個体数の変動が生じている可能性があり、その場合、ガ類の幼虫を餌とする本種にも影響があると考えられる。

【関連文献】

三橋渡, 1998; 大島町史編さん委員会(編), 2000.

(執筆: 高桑正敏・雛倉正人)



エゾカタビロオサムシ

Campalita chinense

コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 23～31mm。背面は銅色で、上翅に3列の金色の孔点列がある。肩と後翅は発達する。草地などの開けた環境に生息し、他の昆虫、特にヨトウムシ類を捕食する。灯火にも飛来する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

主に農園や明るい樹林環境に生息していると思われるが、採集個体のほとんどは灯火に飛来したものであるため、生息環境は不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大島、新島、八丈島の記録があり、これらの島では生息環境と推測される樹林環境などの変化は特に認められないが、国内移入種のアズマヒキガエルやニホンイタチによって捕食されている可能性が高い。

【関連文献】

大島聡, 1979; 川畑喜照, 2006.

(執筆: 高桑正敏・雛倉正人)



アオオサムシ

Carabus insulicola

コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 22～31mm。背面は緑色の金属光沢を持つ。地上性でミミズなどの小動物を捕食する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州

【伊豆諸島における生息環境】

幅広い樹林環境に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大島のみに記録がある。近年移入されたと考えられるアズマヒキガエルなどの国内移入種が生息環境に悪影響を与える可能性がある。

【関連文献】

奥村尚, 1968; 鳥羽明彦, 2001.

(執筆: 荻部治紀・雛倉正人)



セアカオサムシ

Hemicarabus tuberculosus

コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

体長 16～22mm。小型の種で前胸は赤銅色、上翅側片は光沢ある赤銅色から金色を帯びる。上翅には特有のこぶ状隆起の列がある。主に草地に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

大島の山頂部の疎林や草地に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

一般に疎林や草地環境を好む種で、植生遷移の進行が生息環境に悪影響を与える可能性がある。また、側溝内で死亡している個体も目立つので、南西諸島などで用いられているような、脱出可能な構造に側溝を改修するなどの対応が望まれる。

【関連文献】

黒川誠治, 1979; 大島町史編さん委員会 (編), 2000.

(執筆: 荻部治紀・田尾美野留)



キベリマルクビゴミムシ

Nebria livida angulata

コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

EN

【形態・生態】

体長 13.0～16.5mm。頭部と上翅は黒色。上翅側縁は黄褐色の縁取りを持つ。河原などに生息するカワチマルクビゴミムシに一見似ているが、本種は頭部が黒く、前胸の大部分が黄褐色で広く黒化しないこと、体が一般に大きいことから区別できる。一般に砂礫質の河原に見られることが多いが、単発で造成地などで得られることもあり、生態的に未解明の部分が多い。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1967年に御蔵島で1個体が採集されているのみである。生息状況の把握が望まれる。

【関連文献】

澤田玄正・渡辺泰明, 1969; 上野俊一ら (編著), 1985.

(執筆: 高桑正敏・田尾美野留)



オオヒョウタンゴミムシ

Scarites sulcatus

コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

CR

環境省

NT

【形態・生態】

体長 28 ～ 38mm。黒色で体は円筒形、前胸の後ろがくびれる。大顎は発達し、前脚はシャベルのような形状。海岸などの砂地に穴を掘って潜み、昆虫などの小動物を捕食する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

海岸部の砂丘地帯に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

今回のレッドリスト改定時の現地調査では、新島の一部の海岸砂丘からのみ確認されている。生息地の砂丘地帯では海岸道路や公園の整備が行われており、生息環境の悪化が進行している。今後、海岸開発の際には、本種の生息の有無を確認し、可能な限り生息地の改変を回避することが望ましい。

【関連文献】

平野幸彦, 1993; 山本和夫, 2000.

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)



オサムシモドキ

Craspedonotus tibialis

コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

体長 20 ～ 24mm。背面は光沢のない黒色。前胸は横長で後端がくびれる。脛節は黄褐色。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

海岸部の砂丘地帯に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

今回のレッドリスト改定時の現地調査では、既知産地を中心に本種の生息適地と考えられる海浜砂丘で調査が行われたが、確認されなかった。今後の確認調査が必要であるが、砂丘地帯では海岸道路や公園の整備が進行しており、生息環境の悪化が進行していると考えられる。

【関連文献】

平野幸彦, 1993; 山本和夫, 1996.

(執筆: 苅部治紀・田尾美野留)



セスジヒラタゴミムシ

Agonum daimio

コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 6 ～ 8mm。体はやや扁平で、頭部と上翅縦斑は濃い緑銅色、他は黄褐色。湿性草地に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

本土では湿地や谷戸などに生息するため、そのような環境に生息すると推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前に三宅島で1個体が採集された記録があるのみであり、現状は不明である。生息している場合はアズマヒキガエルによる捕食の影響を受けている可能性がある。また、伊豆諸島では湿地に限られるため、湿地的環境の保全が望ましい。

【関連文献】

土生昶申, 1942; 上野俊一ら(編著), 1985.

(執筆: 高桑正敏・田尾美野留・雛倉正人)



ヨツモンカタキバゴミムシ

*Badister pictus*コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 6.2 ～ 6.5mm。黄褐色で頭部は黒色、大あごの先端は截断状。上翅に顕著な 2 対の黒斑があり、背面は虹光沢を持つ。湿性草地に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

本土では湿性草地に生息するため、そのような環境に生息すると推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1964年に三宅島で1個体が採集されている。詳細な採集場所は明らかでないが、他地域での生息環境から推測すると、湿地で得られた可能性が高い。しかし、三宅島における湿地環境は乏しく、生存が危惧される。また、アズマヒキガエルによる捕食の影響を受けている可能性が高い。

【関連文献】

渡辺泰明・相馬州彦, 1972; 上野俊一ら (編著), 1985.

(執筆: 高桑正敏・田尾美野留・雛倉正人)



コヨツボシゴミムシ

*Panagaeus robustus*コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 9.5 ～ 10.5mm。上翅は黒色で 2 対の橙黄色の紋を持ち、前紋は拡大する。触角と脚は黒色。主に草地に生息する。本土では北日本に多い。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、九州

【伊豆諸島における生息環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本州の太平洋岸では茨城県付近が南限と思われるため、標本の確認や生息の有無を把握することが望まれる。

【関連文献】

東京都港湾局, 1984; 上野俊一ら (編著), 1985.

(執筆: 田尾美野留・雛倉正人)



クロケブカゴミムシ

*Peronomerus nigrinus*コウチュウ目
オサムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 7.0 ～ 8.5mm。背面は黒色で光沢があり、細毛に覆われる。前胸の最広部は丸い。湿地や河川敷などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1964年に三宅島で1個体が採集されている。詳細な採集場所は明らかでないが、他地域での生息環境から推測すると、湿地で得られた可能性が高い。しかし、三宅島における湿地環境は乏しく、生存が危惧される。

【関連文献】

渡辺泰明・相馬州彦, 1972; 上野俊一ら (編著), 1985.

(執筆: 高桑正敏・田尾美野留・雛倉正人)



マルケシゲンゴロウ

Hydrovatus subtilis

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

DD

環境省

NT

【形態・生態】

体長 2.4 ～ 2.7mm。褐色で体型は幅広い卵型。類似の微小種とは交尾器形状で区別される。池沼の浅瀬や湿地など、植物の多い止水域に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

八丈島から 1 例の記録があるのみで生息環境は不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種の生息に適しているピオトープなどの湿地を調査したが、今回のレッドリスト改定時の現地調査では確認できなかった。1 例のみの記録であり現状は不明である。

【関連文献】

上田康之ら, 1994; 東京都八丈ビジターセンター, 2008.



○ 北野忠

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

コウベツブゲンゴロウ

Laccophilus kobensis

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

体長 3.4 ～ 3.8mm。体型は逆卵型。上翅は黄褐色の地色と褐色の縦条とのコントラストが不明瞭で、上翅の基部後方に V 字状の淡色の横帯がある。池沼や湿地などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

小池沼に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

今回のレッドリスト改定時の現地調査では既知の両島で確認されたが、個体数は少なかった。八丈島では本種の生息地に国内移入種であるニホンイモリが多数確認されたことから、捕食などの悪影響を与えている可能性が高い。現存する湿原への外来種の侵入を防止することが望ましい。

【関連文献】

黒沢良彦, 1978; 川畑喜照, 2007.



○ 北野忠

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

ホソセスジゲンゴロウ

Copelatus weymarni

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 4.6 ～ 5.5mm。体は細長い楕円形でやや扁平、背面は暗褐色。湿地や水たまりなどの浅い止水域に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

小池沼に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

今回のレッドリスト改定時の現地調査では、既知産地のうち、大島、御蔵島鈴原湿原（乾燥化で水域が消失）では確認できなかった。大島の自然水域ではアメリカザリガニが大発生しており、影響を与えている可能性が高い。早急な対策が望まれる。

【関連文献】

中根猛彦, 1996; 川畑喜照, 2007.



○ 北野忠

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

マメゲンゴロウ

Agabus japonicus

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 6.5 ～ 7.5mm。体型は楕円形。頭部・前胸は黒色。上翅は褐色で基部から両側にかけてはやや淡色となる。主に止水域に生息し分布は広い。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

小池沼に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

既知産地のうち、御蔵島鈴原湿原（乾燥化で水域が消失）では確認できなかった。現存する湿原への外来種の侵入を防止することが望ましい。

【関連文献】

澤田玄正・渡辺泰明, 1969; 黒沢良彦, 1978; (財) 国立公園協会, 1994.



© 北野忠

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

ヒメゲンゴロウ

Rhantus pulverosus

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 11.0 ～ 12.5mm。体型は楕円形で光沢がある。背面の地色は黄褐色で、上翅は周辺を除き黒い小斑を密布し、前胸背に黒い円紋がある。主に止水域に生息し分布は広い。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

水田、湿地に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

今回のレッドリスト改定時の現地調査では既知産地を中心に本種の生息適地と考えられるビオトープや水田などを調査したが、確認できなかった。移動能力に優れる種であるので、一時的な飛来個体や人為的な移入個体が記録された可能性もある。

【関連文献】

葛西重雄, 1968; 東京都, 2005.



© 北野忠

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

エゾヒメゲンゴロウ

Ranthus yessoensis

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 13 ～ 14mm。体型は卵形で光沢が鈍い。背面の地色は黄褐色で、上翅は周辺を除き黒い小斑を密布し、前胸背に黒い円紋がある。本州、九州の生息地は、ほぼ火山地帯の止水域に限定されている。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、九州

【伊豆諸島における生息環境】

溶岩流の水たまりに生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大島、八丈島から記録があるが、今回のレッドリスト改定時の現地調査では、大島では生息適地が発見できず、確認できなかった。また、八丈島では溶岩流の跡地に点在する水たまりで比較的多数が確認されたが、国内移入種であるニホンイモリも多数確認され、本種への影響が懸念される。

【関連文献】

川畑喜照, 2007.



© 北野忠

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

シマゲンゴロウ

Hydaticus bowringi

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

EX

環境省

NT

【形態・生態】

体長 12.5 ～ 14.0mm。体形は卵形で強く盛り上がる。上翅は黒色で光沢があり、明瞭な 2 対の黄色帯と基部付近に 1 対の黄色斑がある。前胸背は黄色。池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は八丈島のみと考えられる。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、近年の記録も欠如していることから水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

葛西重雄, 1968; 山本和夫, 1996.



◎北野忠

(執筆: 苅部治紀・須田真一)

コシマゲンゴロウ

Hydaticus grammicus

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

EX

環境省

【形態・生態】

体長 9 ～ 11mm。体型は卵型。頭部と前胸は大部分黄褐色で、上翅には黒色点紋からなる縦縞がある。池沼や湿地などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は八丈島のみと考えられる。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、近年の記録も欠如していることから水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

渡辺泰明・相馬州彦, 1972; 東京都八丈ビジターセンター, 2008.



◎北野忠

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

コガタノゲンゴロウ

Cybister tripunctatus orientalis

コウチュウ目
ゲンゴロウ科

伊豆諸島

EX

環境省

VU

【形態・生態】

体長 24 ～ 29mm。体型は長卵形で、背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で強い光沢がある。前胸背から上翅の側縁は黄色で縁取られる。池沼や湿地などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、小笠原諸島、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田、池沼に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は八丈島のみと考えられる。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、近年の記録も欠如していることから水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

葛西重雄, 1968; 東京都八丈ビジターセンター, 2008.



◎北野忠

(執筆: 苅部治紀)

コガシラミズムシ

Peltodytes intermedius

コウチュウ目
コガシラミズムシ科

伊豆諸島

EX

環境省

【形態・生態】

体長 3.1～3.6mm。体型は卵型。上翅は黄褐色地に黒斑があり、後半に垂合線を持つ。腹部は、第1～5節まで後基節板におおわれる。池沼や湿地などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島、八丈島から記録がある。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、確実な記録は1969年の三宅島のものが最後となっている。水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

葛西重雄, 1968; 東京都八丈ビジターセンター, 2008.



北野忠

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

オオミズスマシ

Dineutus orientalis

コウチュウ目
ミズスマシ科

伊豆諸島

DD

環境省

NT

【形態・生態】

体長 7～12mm。明らかに大型であることと、上翅の側縁が黄色であることにより、他種と容易に区別できる。池沼に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

池沼に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

青ヶ島からの記録があるが、現在同島には水域はない。何らかの誤記録の可能性が高い。

【関連文献】

朝比奈正二郎・梅谷献二, 1955.



北野忠

(執筆: 苅部治紀・須田真一)

セマルガムシ

Coelostoma stultum

コウチュウ目
ガムシ科

伊豆諸島

EX

環境省

【形態・生態】

体長 4～5mm。体型は楕円形で強く盛り上がる。全体黒色で光沢があり、左右の複眼間隔は複眼幅の3倍未満。脚は遊泳毛を欠く。湿地などの浅い止水域や、流れの緩い川の水辺に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田、池沼に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島、八丈島から記録がある。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、確実な記録は1969年の三宅島のものが最後となっている。水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

渡辺泰明・相馬州彦, 1972.



(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)

マゲソガムシ

Pachysternum haemorrhoum

コウチュウ目
ガムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 2.8 ～ 2.9mm。体型は卵型で強く盛り上がる。背面は黒褐色で、上翅には 10 条の点刻列を持つ。地上性で、獣糞や腐敗物に集まる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

獣糞に依存しており、牧場などが生息地と考えられるが、詳細は不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島から記録があるが、同島では火山噴火に伴い家畜の飼育は途絶えた。現状調査が必要である。

【関連文献】

渡辺泰明・相馬州彦, 1972.

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)



シジミガムシ

Laccobius bedeli

コウチュウ目
ガムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

EN

【形態・生態】

体長 3.0 ～ 3.3mm。半球状の体型。前胸背は側縁の黄褐色部を除き黒褐色で、上翅は黄褐色で点刻の周囲が黒褐色。近年、類似の別種が複数あることが判明しており、厳密には交尾器で区別する。池沼に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、九州

【伊豆諸島における生息環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

八丈島から記録があるが、今回のレッドリスト改定時の現地調査では確認されなかった。近年まで近縁種と混同されていた状況もあり、詳細は不明である。

【関連文献】

上野俊一ら (編著), 1985; 東京都八丈ビジターセンター, 2008.

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)



ガムシ

Hydrophilus acuminatus

コウチュウ目
ガムシ科

伊豆諸島

EX

環境省

NT

【形態・生態】

体長 33 ～ 40mm で日本産ガムシ科の最大種。背面は黒色で鈍い光沢がある。腹部は無毛で後胸突起は腹部第 2 節に達する。池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島 (絶滅)、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田、池沼に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は八丈島のみと考えられる。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、近年の記録も欠如していることから水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

倉形和男, 1971.



(執筆: 苅部治紀・須田真一)

ヒメガムシ *Sternolophus rufipes*

コウチュウ目
ガムシ科

伊豆諸島

EX

環境省

【形態・生態】

体長 9～11mm。背面は黒色で鈍い光沢がある。コガムシに似るが明らかに小型で体型もやや細い。池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田、池沼に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は八丈島のみと考えられる。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、近年の記録も欠如していることから水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

東京都八丈ビジターセンター, 2008.



○北野忠

(執筆: 苅部治紀・須田真一)

コガムシ *Hydrochara affinis*

コウチュウ目
ガムシ科

伊豆諸島

EX

環境省

DD

【形態・生態】

体長 16～18mm。背面は黒色で鈍い光沢がある。小顎鬚と脚は赤褐色。池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田、池沼に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は八丈島のみと考えられる。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、近年の記録も欠如していることから水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

倉形和男, 1971.



○北野忠

(執筆: 苅部治紀・須田真一)

マメガムシ *Regimbartia attenuata*

コウチュウ目
ガムシ科

伊豆諸島

EX

環境省

【形態・生態】

体長 3.5～4.0mm。背面は黒色で微細毛を密に装う。池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

湿地や水田、池沼に生息していたと推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は八丈島のみと考えられる。今回のレッドリスト改定時の現地調査でも確認されず、近年の記録も欠如していることから水域の環境悪化によって絶滅したものと判断した。

【関連文献】

葛西重雄, 1968.



○北野忠

(執筆: 苅部治紀・須田真一)

キイロウミハネカクシ

Bryothinusa tsutsuii

コウチュウ目
ハネカクシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長約 2.6mm。扁平で体全体に微毛があり、体色は黄褐色で、腹部は中央部付近を中心にやや黒ずむ。複眼は小さく、上翅は短い。潮間帯の主に砂礫浜の石下などに生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

潮間帯の主に砂礫浜の石下などに生息すると考えられる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島で 1964 年に採集された記録があるのみで、それ以外の記録がない。潮間帯に生息するため、護岸化などの環境変化は生存に対する脅威となりうるが、現状は不明である。その他の島に分布する可能性もあり、今後の情報収集が望まれる。

【関連文献】

Sawada, K., 1971; 渡辺泰明・相馬州彦, 1972.

(執筆: 岸本年郎)



ミクラミヤマクワガタ

Lucanus gamunus

コウチュウ目
クワガタムシ科

伊豆諸島

*

環境省

NT

【形態・生態】

体長♂ 17 ~ 25mm、♀ 18 ~ 23mm。黒色で光沢があり、背面は全く無毛、上翅はときに 1 対の黄～黄赤色紋を現す。♂の大あごは短太で強く湾曲し、内歯は突出が鈍く、端歯は内方を向く。成虫は初夏に出現し、歩行性が強く、飛ばない。

【分布の概要】

伊豆諸島

【伊豆諸島における生息環境】

主にスタジイなど樹林内の地上に発見されるが、都道などでもしばしば見かける。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林地の開発による生息環境破壊・劣化と、舗装道路上および側溝における斃死、それに神津島では外来カエル類による捕食圧が懸念される。捕食者となる外来種（特に哺乳類と両生類）を島に持ち込まないよう十分な配慮が望まれる。

【関連文献】

神奈川県立博物館, 1990; 藤田宏, 2010.

(執筆: 高桑正敏)



ハチジョウノコギリクワガタ

Prosopocoilus hachijoensis

コウチュウ目
クワガタムシ科

伊豆諸島

VU

環境省

【形態・生態】

体長♂ 17 ~ 25mm、♀ 18 ~ 23mm。黒色で光沢があり、背面は全く無毛、上翅はときに 1 対の黄～黄赤色紋を現す。♂の大あごは短太で強く湾曲し、内歯は突出が鈍く、端歯は内方を向く。成虫は初夏に出現し、歩行性が強く、飛ばない。

【分布の概要】

伊豆諸島

【伊豆諸島における生息環境】

主にスタジイなど樹林内の地上に発見されるが、都道などでもしばしば見かける。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林地の開発による生息環境破壊・劣化と、舗装道路上および側溝における斃死、それに神津島では外来カエル類による捕食圧、八丈島ではニホンイタチによる捕食圧が懸念される。捕食者となる外来種（特に哺乳類と両生類）を島に持ち込まないよう十分な配慮が望まれる。

【関連文献】

高桑正敏, 1990; 藤田宏, 2010.

(執筆: 高桑正敏)



オオコブスジコガネ

Afromorgus chinensis

コウチュウ目
コブスジコガネ科

伊豆諸島

EN

環境省

VU

【形態・生態】

体長 11.0 ~ 13.1mm で日本産のコブスジコガネ類中最も大型。前胸背側縁は中央が張り出し、小盾板は3葉片状。海岸の砂上に打ち上げられた海鳥や魚の死体に集まり、灯火にも飛来する。稀に台風の直撃などでオオミズナギドリ等の鳥類の死体や比較的大型の魚類の死体が大量に打ち上げられると、一時的に数を増すことがある。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、九州

【伊豆諸島における生息環境】

自然度の高い砂浜で、かつ漂着物の多い場所に生息する。通常は砂に深く潜って夜間のみ活動し、個体数も少ないため、発見は容易ではない。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

成虫・幼虫ともに海鳥や魚の死体を餌としているため、極力死体は自然状態のまま放置することが最善の保護となる。本種の生息場所の多くは海水浴場となっているため、海岸の美化と生態系の維持の両立が課題となる。

【関連文献】

渡辺泰明・相馬州彦, 1972; 川井信矢ら (編著), 2005.

(執筆: 川井信矢・雛倉正人)



ダイコクコガネ

Copris ochus

コウチュウ目
コガネムシ科

伊豆諸島

CR

環境省

VU

【形態・生態】

体長 18 ~ 34mm で日本最大の糞虫。前胸前角は裁断状で角ばり、上翅の条溝は浅く、間室は網目状の印刻に覆われる。♂は頭部に1本の角を持ち、大型個体では発達して弓状に曲がる。主に草丈の短い放牧地に生息し、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、九州

【伊豆諸島における生息環境】

大型獣の糞に依存し、大島と三宅島の放牧地帯から記録されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大島の放牧場では、かつて多数の家畜が放牧されていたが、現在では、飼育数の減少もあって、ほぼ休止状況にある。また、三宅島でも火山噴火の影響で、放牧は中止されており、餌の供給がきわめて脆弱な状況で、今回のレッドリスト改定時の現地調査期間中には確認できなかった。本種確認のための調査を実施し、本種の生息が確認された場合は、継続的に大型獣の糞を確保することが望まれる。

【関連文献】

平野幸彦, 1983; 塚本圭一, 1987; 塚本圭一, 1991.

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)



アラメエンマコガネ

Onthophagus ocellatopunctatus

コウチュウ目
コガネムシ科

伊豆諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

体長 3.4 ~ 5.3mm。体表は微毛に覆われる。前胸背には大きな眼状点刻を密布し、上翅間室にも大きな点刻がある。♂は頭部に1本の角を持つ。砂の粒が細かい海岸の砂地に生息し、新鮮な犬や人、牛などの糞に集まる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州

【伊豆諸島における生息環境】

大島の砂丘地帯でのみ記録されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録のある場所は海浜ではなく、内陸部の砂丘地帯の動物園周辺に限定されている。そのため、人為的に移入された可能性もある。既知産地では植生遷移が進行しており、生存に対する脅威となっていると考えられる。

【関連文献】

苅部治紀ら, 2000.

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)



オオماغソコガネ

Aphodius haroldianus

コウチュウ目
コガネムシ科

伊豆諸島

EX

環境省

【形態・生態】

体長 8.2 ～ 12.5mm。体はやや扁平な長楕円形。体は光沢のある黒色で、上翅は黄褐色のことが多い。主に放牧地に見られるが、林内に生息することもある。獣糞に集まる。

【分布の概要】

伊豆諸島（絶滅）、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

牧場に生息していた。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な生息地として三宅島が知られていたが、2000 年の雄山の噴火によって牧場は火山灰で覆われてしまい、飼育されていた牛は島外に避難した。そのため、本種は絶滅したと考えられる。

【関連文献】

渡辺泰明・相馬州彦, 1972; 川井信矢ら（編著）, 2005.

（執筆者：高桑正敏・苅部治紀・雛倉正人）



ケブカماغソコガネ

Aphodius eccoptus

コウチュウ目
コガネムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 7.5 ～ 9.0mm。体は暗褐色、背面には毛を装い、脚はこの属としては長い。樹林・草地等多様な環境に生息し、獣糞に集まり、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国

【伊豆諸島における生息環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

利島の記録はあるが、生息状況などの現状は不明である。

【関連文献】

山本和夫, 1996; 川井信矢ら（編著）, 2005.

（執筆者：苅部治紀・雛倉正人）



コマグソコガネ

Aphodius pusillus

コウチュウ目
コガネムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 2.6 ～ 4.5mm。体は長楕円形で、体は光沢のある黒～黒褐色。前胸の側縁を中心に淡褐色部を持つが変異が大きい。放牧地や河川などの開けた環境に生息し、獣糞に集まる。春に個体数が多い。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

牧場に生息すると考えられる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島の記録があるが、2000 年の雄山の噴火によって牧場は火山灰で覆われてしまい、飼育されていた牛は島外に避難した。そのため、本種は著しく減少したと考えられるが、現状は不明である。

【関連文献】

渡辺泰明・相馬州彦, 1972; 川井信矢ら（編著）, 2005.

（執筆者：高桑正敏・苅部治紀・雛倉正人）



オオフタホシマグソコガネ

Aphodius elegans

コウチュウ目
コガネムシ科

伊豆諸島

VU

環境省

【形態・生態】

体長 11 ～ 13mm。体は光沢ある黒色で、上翅は黄色で大きな 1 対の黒紋を持つ顕著な外見の種。放牧地に生息し、新鮮な牛・馬などの糞に集まる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

牧場に生息する、または生息していた。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島では近年まで記録されていたが、2000 年の雄山の噴火によって牧場は火山灰で覆われてしまい、飼育されていた牛は島外に避難した。そのため、三宅島では絶滅したと考えられる。八丈島でも近年の採集例は少ない。

【関連文献】

川井信矢ら (編著), 2005; 川畑喜照, 2009.

(執筆: 高桑正敏・苅部治紀・雛倉正人)



ヒメスジマグソコガネ

Aphodius hasegawai

コウチュウ目
コガネムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 3.0 ～ 4.3mm。体は光沢の鈍い黒色で、上翅や全体が赤褐色の個体もある。上翅間室は強く膨隆し、条溝は隆起物で縁どられる。林内のサル糞から見つかることが多いが、放牧地でも見つかり、鳥獣の死体を食べることもあり雑食性が強い。春に個体数が多い。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

八丈島のみから記録されているが、詳細な情報は不明である。

【関連文献】

東京都八丈支庁土木課・東京都八丈ビジターセンター (編), 2003; 川井信矢ら (編著), 2005.

(執筆: 苅部治紀・雛倉正人)



ヤマトアオドウガネ伊豆諸島亜種 (イズアオドウガネ) ※備考 (p.430)

Anomala japonica izuensis

コウチュウ目
コガネムシ科

伊豆諸島

*

環境省

【形態・生態】

体長 17 ～ 21mm で本土亜種より小形。典型的な個体は背面が緑色で強い光沢があり、銅赤色を帯びることもある。北部の島に生息する個体は本土産に類似する。食葉性の種で、樹林・草地等多様な環境に生息する。

【分布の概要】

伊豆諸島

【伊豆諸島における生息環境】

明るい樹林・疎林環境に多く、畑地や荒地にも見られる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

近年、同属の近縁種であるアオドウガネが伊豆諸島の各島に進出するようになり、個体数が減少しつつある。

【関連文献】

川畑喜照, 2009; 小林裕和・松岡進樹, 2010.

(執筆: 高桑正敏・雛倉正人)



コモンホシハナノミ

Hoshihananomia borealis

コウチュウ目
ハナノミ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 10～14mm。体は黒色で、上翅に 3 対の白紋があるが、紋は類似種に比べてきわだって小さい。伊豆諸島がタイプ産地であるが、近年はほとんど南西諸島と屋久島で記録されている。タイプ標本はガクアジサイの花から得られている。

【分布の概要】

伊豆諸島、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

不明だが、樹林環境と推測される。

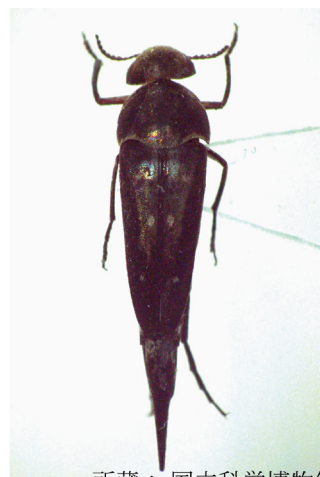
【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島では八丈島だけに分布が知られているが、1949 年以前の 4 個体以外に記録されていない。本種の訪花性は弱いことから発見はそれほど容易でないが、多くの採集者が訪れているにもかかわらず、近年の確認例がない。ただし、樹林環境に生息すると推測されるので絶滅したとは考えにくい。

【関連文献】

Nomura, S., 1957; 高桑正敏, 2007.

(執筆: 高桑正敏)



所蔵: 国立科学博物館

ヨツスジハナカミキリ

Leptura ochraceofasciata ochraceofasciata

コウチュウ目
カミキリムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 14～21mm。前胸背は黄色微毛で密におおわれる。上翅は 4 帯状の黒紋を持ち、端は内・外角とも突出する。少なくとも前・中肢はほぼ黄褐色、一般に♂後肢の脛節は後方が強く膨らむが、伊豆諸島産はそれほど強くない。成虫は初夏～夏に出現、各種の花や伐採木に集まる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

スダジイを主体とした照葉樹林内からオオバヤシャブシなどの夏緑樹林内まで生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島での寄主植物は未確認であるが、幼虫は各種の倒木に穿入し、特にマツ科を好むので、クロマツ林の存続が重要と考えられる。近年はマツノザイセンチュウによるクロマツの枯死が目立つため、センチュウ駆除が望まれる。ただし、薬剤散布は生態系に悪影響を与えるため、逆効果である。

【関連文献】

高桑正敏, 1979; 藤田宏, 2012.

(執筆: 高桑正敏)



ヨツボシカミキリ

Stenygrinus quadrinotatus

コウチュウ目
カミキリムシ科

伊豆諸島

CR

環境省

EN

【形態・生態】

体長 8～14mm の小型種で、赤色～暗赤色。前胸は縦長、光沢を欠く。上翅は 2 対の明色紋とその周りに暗色部を持つ。肢の各腿節は強く膨らむ。成虫は初夏～夏に出現、クリの花や各種の薪に集まるほか、灯火にもよく飛来する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

生息環境は不明だが、日本本土での生息環境から推測すると、照葉樹林内または夏緑樹林内に生息すると考えられる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島では 1970 年代における少数の採集例があったが、近年の調査でも生息情報が全くなく、すでに絶滅した可能性が強い。ただし、絶滅・衰亡に至った理由は不明である。

【関連文献】

伊藤敏仁, 1973; 藤田宏, 2012.

(執筆: 高桑正敏)



ツヤケシヒゲナガコバネカミキリ

Molorchoepania mizoguchii

コウチュウ目
カミキリムシ科

伊豆諸島

*

環境省

【形態・生態】

体長 4.5 ～ 9.0mm。体は黒色、ときにやや栗色がかかる。上翅は短縮し、小盾板付近に長毛を持つ。触角は♂で体と同長、♀で上翅端に達する程度。成虫は初夏に出現し、ブドウ類の枯れ蔓に見られる。

【分布の概要】

伊豆諸島、四国、九州、対馬、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

樹林に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島では 1970 年代に採集されていたが、近年の調査でも生息情報が全くない。ただし、ブドウ類は多数生育しているため、生育状況の把握が望まれる。

【関連文献】

伊藤敏仁, 1973; 藤田宏, 2012.

(執筆: 高桑正敏・雛倉正人)



ヘリグロベニカミキリ

Purpuricenus spectabilis

コウチュウ目
カミキリムシ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 13.5 ～ 19.0mm。体は赤色、前胸背は側縁が黒く縁どられ、5 個の黒紋がある。成虫は春に出現し、花や、広葉樹の伐採木に飛来した個体を見ることが多い。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、対馬

【伊豆諸島における生息環境】

もし分布するとすれば、本土と同様に夏緑樹林内に生息すると推測される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

青ヶ島で 1 個体の記録があるだけで、伊豆諸島では近年の生息情報がまったくない。本種が伊豆諸島では青ヶ島だけに分布することは考えにくいので、人為的な作用によって国内移入されたか、ラベルの情報が誤記入されたかのどちらかである可能性が高い。

【関連文献】

衣笠恵士, 1979; 藤田宏, 2012.

(執筆: 高桑正敏・雛倉正人)



シロオビチビカミキリ伊豆諸島亜種

Sybra subfasciata mikurensis

コウチュウ目
カミキリムシ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 9 ～ 12mm。本土亜種に似ているが体は黒褐色で、上翅肩部付近より発達する隆条は強く盛り上がる。上翅中央の白色微毛による横帯はより明瞭。成虫は夏に出現し、スダジイの新しい枯れ枝に集まる。

【分布の概要】

伊豆諸島

【伊豆諸島における生息環境】

スダジイを主体とした照葉樹林に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島では 2000 年の雄山の噴火以後、2004 年に 1 個体が確認されたのみで、2010 年頃の調査でも確認されていない。噴火が本種の生存に負の影響を与えた可能性がある。御蔵島でも以前より個体数が少ないようである。

【関連文献】

榎原寛・岡部宏秋, 2006; 藤田宏, 2012.

(執筆: 高桑正敏・雛倉正人)



チャイロヒゲビロウドカミキリ

Acalolepta kusamai

コウチュウ目
カミキリムシ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長 17 ～ 29mm の中～大型種。触角は長く、♂で体長の 2.5 倍、♀で 1.5 倍程度、第 1 節は端方に強く肥大する。上翅は無紋だが、眺める角度によって光沢紋が複雑に現れる。成虫は夏に出現、ニワトコまたはユズリハの生木に集まり、しばしば寄生木を枯らす。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

樹林環境に生息し、大島・御蔵島ともにユズリハを寄主植物としている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

寄主植物であるユズリハは伊豆諸島では多くないため、樹林を管理・改変する場合にはユズリハの有無に注意することが望まれる。

【関連文献】

藤田宏, 2012; 藤田宏・林秀信, 2013.

(執筆: 高桑正敏)



キンケツツヒメゾウムシ

Phaenomerus foveipennis

コウチュウ目
ゾウムシ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長 2.4 ～ 3.8mm。体は円筒形で黒色、上翅には金色斑がある。脚の中・後腿節は大きく膨らんで突起を持ち、後脛節は湾曲する。枯れ木に生息し、他県ではクイムシ穿入孔から採集された例もある。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島

【伊豆諸島における生息環境】

生息環境は不明だが、スダジイを主体とした照葉樹林内からオオバヤシャブシなどの夏緑樹林内まで生息するものと思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島では個体数は多かったらしいが、1990 年の雄山の噴火以後、記録がない。2010 年頃の調査でも確認されなかったため、たび重なる噴火が本種の生存に負の影響を与えた可能性がある。

【関連文献】

Morimoto, K. & S. Miyakawa, 1985; 渡辺泰明・相馬州彦, 1972.



◎ 東京農業大学

(執筆: 高桑正敏・雛倉正人)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名については、東京都の野生生物目録 1998 年版を基本とし、評価者の判断により修正を加えた。また、配列は以下の 3 巻に従った。

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (編著), 1986. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ . 保育社 . viii + 514 pp.

黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅲ . 保育社 . . x + 500 pp.

林匡夫・木元新作・森本桂 (編著), 1984. 原色日本甲虫図鑑Ⅳ . 保育社 . vii + 438 pp.

【備 考】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
ヤマトアオドウガネ伊豆諸島亜種 (イズアオドウガネ)	伊豆諸島産は亜種を認めない考え方もある。

【留意種とした理由】

和名	留意種とした理由
ミクラミヤマクワガタ	御蔵島と神津島にのみ生息する。御蔵島においては健全に生息しているが、神津島では生息環境が劣化していることから衰退の可能性がある、留意が必要である。
ヤマトアオドウガネ伊豆諸島亜種 (イズアオドウガネ)	八丈島では近似種で国内外来種のアオドウガネが侵入し、勢力を拡大しつつあるため、本種の衰亡が危惧される。また、八丈島以外の島もアオドウガネが今後侵入することが懸念されるため留意が必要である。
ツヤケシヒゲナガコバネカミキリ	伊豆諸島では新島でのみ生息が確認されており、伊豆諸島が分布の北限（東限）である。ブドウ類をホストとし、個体群としては非常に小さいと推定されるので、今後の推移に留意する必要がある。

【関連文献】

- 荒井充朗, 2000. 伊豆大島でカワラハンミョウの白色紋の発達した個体を採集. 月刊むし, (355): 40-41.
- 朝比奈正二郎・梅谷献二, 1955. 伊豆青ヶ島の昆虫. 資源科学研究所彙報, (38): 153-156.
- 榎戸良裕, 1989. 伊豆諸島のハンミョウ類. 神奈川虫報, (90): 147-152.
- 藤田宏, 2010. 世界のクワガタムシ大図鑑. 472 pp. + 248 pls. むし社.
- 藤田宏, 2012. 伊豆諸島のカミキリ相 (中間報告). 月刊むし, (492): 18-30.
- 藤田宏・林秀信, 2013. 伊豆諸島・大島のカミキリムシ (中間報告). 月刊むし, (505): 19-30.
- 土生昶申, 1942. 三宅島の歩行虫. 昆虫, 16(2): 76-79.
- 平野幸彦, 1983. ダイコクコガネ伊豆大島の記録. 月刊むし, (153): 36.
- 平野幸彦・上田康之・渡弘・吉田篤人, 1993. 伊豆新島産甲虫類採集報告. 神奈川虫報, (104): 1-12.
- 伊藤敏仁, 1973. 伊豆新島のカミキリ (中間報告). 月刊むし, (23): 5-7.
- 神奈川県立博物館, 1990. 甲虫の魅力ークワガタとハナムグリの世界を探るー. 64 pp.
- 荻部治紀・豊田浩二・松本慶一, 2000. 伊豆大島からのアラメエンマコガネの記録. 甲虫ニュース, (129): 13.
- 葛西重雄, 1968. 八丈島動植物総目録, 東京都教育庁八丈出張所. 164 pp.
- 川畑喜照, 2006. 伊豆諸島八丈島の甲虫 I. 神奈川虫報, (154): 11-18.
- 川畑喜照, 2007. 伊豆諸島八丈島の甲虫 II. 神奈川虫報, (157): 27-31.
- 川畑喜照, 2009. 伊豆諸島八丈島の甲虫 IV. 神奈川虫報, (167): 1-9.
- 川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志 (編著), 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第 1 巻食糞群. 189 pp. 昆虫文献六本脚.
- 衣笠恵士, 1979. 青ヶ島で採集した甲虫. 月刊むし, (104): 46-47.
- 小林裕和・松岡進樹, 2010. アオドウガネとヤマトアオドウガネ. 鯉角通信, (21): 93-96.
- 倉形和男, 1971. 伊豆八丈島の甲虫. 神奈川虫報, (37): 36-37.
- 黒川誠治, 1979. 伊豆大島におけるセアカオサムシの記録. 月刊むし, (104): 44.
- 黒沢良彦, 1978. 神津島天上山のゲンゴロウ類. 甲虫ニュース, (42): 3.
- 楨原寛・岡部宏秋, 2006. 三宅島噴火 4, 5 年後のカミキリ相ー大発生したカミキリムシー. 月刊むし, (419): 32-41.
- 三橋渡, 1998. 伊豆諸島利島のクロカタビロオサムシの追加記録. 月刊むし, (329): 40.
- Morimoto, K. & S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of the Izu Islands, Japan (Coleoptera). *Mushi*, 50(3): 19-85.
- 中根猛彦, 1996. クロセスジゲンゴロウの行方, 昆虫と自然, 31(13): 41-43.
- Nomura, S., 1957. Mordellid-and elmids-beetles of Yakushima (Coleoptera). *Entomological Review Japan*, 8: 40-44.
- 大野正男, 1994. 昆虫類. In: 八丈島自然公園内環境基礎調査報告書, pp. 263-307. (財) 国立公園協会.
- 奥村尚, 1968. 伊豆大島の歩行虫. 甲虫ニュース, (2): 4.
- 大島町史編さん委員会 (編), 2000. 東京都大島町史 自然編. 東京都大島町. 272 pp.
- 大島聡, 1979. エゾカタビロオサムシ八丈島の記録. 月刊むし, (104): 44.
- Sawada, K., 1971. Aleocharinae (Staphylinidae, Coleoptera) from the intertidal zone of Japan. *Publication of the Seto Marine Laboratory*, 19: 81-110.
- 澤田玄正・渡辺泰明, 1969. 御蔵島の昆虫相. 農学集報, 14(1): 1-48.
- 高桑正敏, 1979. 伊豆諸島のカミキリ相の起源. 月刊むし, (104): 35-40.
- 高桑正敏, 1990. ハチジョウノコギリクワガタの雄はなぜ倒木下に潜むのか?. 月刊むし, (231): 20-25, pl. 1.
- 高桑正敏, 2007. 日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 10. 甲虫ニュース, (157): 1-4.
- 鳥羽明彦, 2001. 伊豆大島産クワガタ・ハンミョウ採集記. 月刊むし, (361): 38-43.
- 東京都, 2005. 事後調査報告書 (工事完了後 その 3)ー神津島空港整備事業ー. 東京都. 110 pp.
- 東京都八丈ビジターセンター, 2008. 淡水に棲む生きものたち / 淡水生物調査結果. こっこめ通信, (88): 2-3.
- 東京都八丈支庁土木課・東京都八丈ビジターセンター (編), 2003. 八丈島昆虫リストの改定. *hachijoensis*, 4 [東京都八丈ビジターセンター平成 13 年度環境教育活動報告書]: 42-43.
- 東京都港湾局 (編), 1984. 環境影響評価書ー新島空港整備事業ー 資料編. 東京都港湾局離島港湾部. 135 pp.
- 塚本圭一, 1987. 小島嶼産糞虫について, *LAMELLICORNIA*, (3): 31-41.
- 塚本圭一, 1991. 日本産食糞性 (広義) コガネムシ類の日本列島における分布記載. *SAIKAKU*, (10): 34-65.
- 上田康之・高崎鉄也・露木繁雄・吉田篤人・渡弘, 1994. 神奈川有志による八丈島甲虫採集会報告. 神奈川虫報, (108): 1-14.
- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑 II. 保育社. viii + 514 pp.
- 渡辺泰明・相馬州彦, 1972. 三宅島の昆虫相. 農学集報, 17(1): 1-58.
- 山本和夫, 1996. 昆虫類目録. In: 新島村 (編). 新島村史 資料編 I 別冊 動植物目録・自然関係資料, pp. 61-81. 新島村.
- 山本和夫, 2000. 新島の植物、新島に棲息する哺乳類、両生類、爬虫類. 平成 10 年度 新島村博物館年報, pp. 59-78.